

住
宅
の

空間原論

遠藤政樹 + 小泉雅生 + 佐藤光彦 + 下吹越武人 || 著

それぞれの分野が高度に専門化・分業化が進んだ故の弊害も散見されるようになつた現在、建築家には改めて領域を超えた横断的な思考が求められている。このような背景から、設計に取り組む人のための「計画原論」をあえて「空間原論」という言葉に置き換えている。建築は多義的かつ重層的な思考を基に様々な事柄を統合して成り立つ。この統合する力 || デザインの視点から空間の根幹を見つめ直す試みが「空間原論」なのである。

はじめに

ある建築家から誘われて小川流煎茶献茶式に訪れたことがある。私はお茶の知識に乏しく、抹茶と煎茶の違いさえもわからずにただ興味本位で京都・下賀茂神社へ向かった。献茶式は楼門を抜けて正面にある高床式の舞殿で執り行われる。舞殿上で家元がお茶を点て、御神前へ供えるのだが、その振る舞いはまるで舞踏のように優雅で、時に居合抜きのように鋭く、すべての動きに無駄がない見事な所作だった。式の後、供御所に設けられた煎茶席で初めて煎茶を体験したのだが、茶碗へわずか一滴だけ注がれた煎茶の味に驚いた。その一滴の中に喻えようのない奥深い味わいが広がっていたのだ。一瞬で飲み干した後は言葉を失い、呆然と茶碗の底を眺めるしかできなかつた。このような衝撃は初めての体験だつた。

茶席が終わり、小川後楽六世家元の話を伺う機会を得た。家元によると、作法とは様式や形式ではなく、おいしいお茶を点てるための技術であるという。煎茶の世界を一新した小川可進(1786~1855)が「茶には法あつて式なし、式はその法中にあり」(『喫茶弁』)と残している。煎茶の作法は、寒暖や乾湿などの気象条件を踏まえ、客人のために茶本来の味を引き出すための試行錯誤の中で培われたそうだ。私はその本質的で明快な説明に深く感銘した。

料理やお茶はまったく知識がない素人でもおいしい、まずいが瞬時にわかる。空間もそれに似ていて、良い空間と悪い空間はすぐにわかる。しかし、良い空間がわかつてもどのようにすれば良い空間をつくることができるかを理解することは難しい。良い空間をつくるためには正しい技術が必要なのだが、そうした技術には定型化した方法というものではなく、気象条件や社会状況、敷地の環境や求められる機能などを読み取りながらその都度適切な方法を選択し、時には新たな方法を開発する能力が求められる。このような統合的な技術のことを「作法」と呼んでみると、良い空間にも作法があるのでないだろうか?という問いかけか

らこの本はスタートした。

では、空間における作法とは何だろうか。

建物が完成した時に「オープンハウス」と呼ばれる見学会が行われることがある。「オープンハウス」は完成後にはなかなか見ることのできない内部空間を体験できる貴重な機会であり、一方で設計者も見学に訪れた人から直接意見を聞くことができるため双方にメリットがあり、近年は盛んに行われている。その際によく耳にする会話は「なぜ鉄骨造にしたの?」「あの窓はなぜあの位置にあるの?」「断熱処理は?」「どっちから風が吹く?」「音は大丈夫?」など、建物の性能や居住性に関わる質問が多い。もちろん建築家が手掛ける建物には新しい試みや創意工夫に溢っていて、これらの質問はその仕組みを読み取りたいという旺盛な向上心の表れなのだが、建築家は設計のコンセプトや思想と同じくらいに空間の居住性能や居心地を重視していることがわかる。

どんなに斬新なコンセプトをもつ空間デザインでも居心地が悪ければ身も蓋もない。空間に最低限備えるべき要素は快適な居住性能や居心地の良さである、という認識が建築家の基本姿勢として共有されているのだ。このような共通認識の中に〈空間の作法〉と呼ぶべきものが潜んでいると思う。しかし、作法とはある集団の中でのみ共有されるという閉鎖的な特徴も備えている。お茶や建築の世界に通じた人には常識的な事柄でも外から見ると理解不能で、その閉鎖性が災いして、時には内部にいる人でさえその意義を失い形骸化する危険性も帶びている。作法の根底にある意図を読み取り、その一般性を抽出して新たな枠組みに与えることで、集団の内外を超えて共有されることが重要なのだ。この共有されるべき一般性を本書では、〈空間原論〉として展開している。

もともと建築計画の分野では「計画原論」と呼ばれた分野があり、音や光、空気、配置、プロポーション、身体など建築の基礎的項目が含まれていた。しかし、建築学会において1959年に「環境工学」が「建築計画」から分離したことで「計画原論」という分野は姿を消した。それぞの分野が高度に専門化・分業化が進んだ故の弊害も散見されるようになつた現在、建築家には改めて領域を超えた横断的な思考が求めらるべく要素は快適な居住性能や居心地の良さである、という認識が建築家の基本姿勢として共有されているのだ。このような共通認識の中に〈空間の作法〉と呼ぶべきものが潜んでいると思う。しかし、作法とはある集団の中でのみ共有されるという閉鎖的な特徴も備えている。お茶や建築の世界に通じた人には常識的な事柄でも外から見ると理解不能で、その閉鎖性が災いして、時には内部にいる人でさえその意義を失い形骸化する危険性も帶びている。作法の根底にある意図を読み取り、その一般性を抽出して新たな枠組みに与えることで、集団の内外を超えて共有されることが重要なのだ。この共有されるべき一般性を本書では、〈空間原論〉として展開している。

本書は建築設計の実務に携わる4人の建築家が執筆した。対象は身近で空間性が捉えやすい住宅を中心と選んでいた。設計の際に考えなければならない大切な視点を「身体」、「流れ」、「光と熱」、「インターフェイス」、「集合」、「場所」、「構法」の7項目に分類し、できるだけ実例を紹介しながら、具体的なデザインを基に論を展開する構成とした。また、紹介する事例は可能な限り図面を掲載して、設計資料としても役立つように考慮している。図面は発表当時の雑誌や作品集などから新たにトレースして縮尺を1/300に統一したが、集合住宅のような規模の大きな建築に関しては紙面の都合に合わせて縮尺を変えている。

前述したように、建築は多様な背景を統合して構築されるので、項目ごとに住宅を論じることはその設計思想に対して誤解を生むかもしれないし、そもそも項目の不足や、体系的な羅列を成していないため、〈論〉というよりも〈考〉というべき内容に近いのかもしれない。それでも、現実の空間や設計に携わってきた4人の建築家が議論を重ね、展開した〈論〉には、より実践的な〈空間の作法〉が現れているし、取り上げた項目の取捨選択や強弱によって空間の固有性がつくり出されていることが読み取れるだろう。より多くの人たちが建築を構想する際の基礎資料として本書を手元に置いてくれることを著者一同願っている。

はじめに iii

I 身体	II 流れ	III 光と熱	IV インターフェイス	V 集合	VI 場所	VII 構法
2 スケール	2 空気	2 光	4 境界	2 領域	3 屋根	5 木
1 しつらえ	1 力	1 エネルギー	1 窓	1 家族	2 コンテクスト	3 コンクリート
2 10	2 26	1 48	90	98	118	152
1 2	1 20	1 56	80	74	134	160
			64			142
				106		176
				98		168
						184

column 空間との出会い

索引

193

ねじれた空間	サント・シャペル
古い町家	原郵
96	46
62	18

I 身体

body



スケール

S' 01

建築においてスケールのデザインはとても重要で、同じ空間構成でもスケールの大小によってまったく異なる空間性が生まれる。建築は実物大でスタディすることが難しいため、常に縮小したサイズで実際の空間をイメージしなければならない。特にCADやCGはモニター上で自由に拡大・縮小を行うスケールレスな世界なので、具体的な空間スケールの把握がとても困難である。適正なスケール感覚を養う唯一の方針は現実の空間を体験し、その空間がどのような寸法体系で成り立っているかを学ぶことである。

身体という空間のモノサシ

わたしたちは空間の大きさを認識する能力を経験則として培っている。それは自らの体の動きと、相手や物との距離から養われる相対的な感覚であり、身体の大きさと動作が基準となっている。身体的なスケールに馴染んだ空間は親しみや心地良さを感じることが多く、身体的スケールを超えた空間には驚嘆や恐怖の念を抱くこともある。そうした超身体的な空間の特徴が顕著に現れているのが教会建築である。その一例としてバチカン市国の大聖堂（サンピエトロ大聖堂）（1506年に再建に着手、1626年に竣工）を挙げると、数えきれないほどの人を同時に収容できる平面の大きさと、人々の密集とは無縫に屹立する巨大な吹抜け空間に圧倒される。世界のすべてを覆いつくすような内部空間は端正で力強い列柱とボルト屋根で支えられ、ステンドグラス越しの清らかな光のハーモニーに満たされる。巨大な空間はまさしく神の存在を暗示するものとしてつくられている。

元来、建築は宗教や王侯、貴族のために建設され、象徴や権威を形象する役割を担っていた。より大きなものをつくりたいという、人間の本来的な資質と権力の表象というふたつの欲望が重なり、建築は技術の発展と共に大きくなり、巨大な内部空間を獲得するに至った。しかし、近代になると建築の対象は権力から市民社会へと移行する。建築は機能やライフスタイルを表すものとなり、空間は身体の大きさを基にしたスケールへと移り変わっていく。現代の住宅が人々の生活のための器としてつくられ、その空間は身体的なスケールを基に構築されるのは必然的な流れといえよう。

尺度としてのスケール

そもそも、スケールという言葉は単位・尺度としての使い方と、相対的な空間の大きさを示す場合の2通りの意味を示す。日本には「起きて半疊、寝て一疊」という言葉がある。身体の大きさや振舞いを疊という単位で表したわかりやすい喻えであり、誰にでもすぐに把握できる空間スケールとしても共有されている。建築には部位を規定する尺度が建築全体を秩序立てるしくみが内在していて、地域の風土が育んだ空間スケール特性が存在する。私たちが生活慣習の中で自然に空間スケールを身につけているのはそのためである。



ヴィトルヴィウス的人体図



サンピエトロ大聖堂



サンピエトロ大聖堂

加速したことも一因として考えられるが、「モデュロール」の限界はスケールを狭義な定義に限定してしまったことだろう。地域間の空間スケールの差異からもわかるように、スケールの概念は身体の大きさや美学的規範に限られるものではなく、風土に沿った生活様式や文化性、生産性などが長い時間を経て構築された多様性に富む概念として捉えなければならないのである。

小空間のスケール性

最小寸法からなる空間は建築的テーマとして、これまでに様々な試みが行われている。小空間のスケールは必然的に身体の振舞いが基本となることが多い。小空間の代表的な例として茶室を見てみよう。千利休の「妙喜庵茶室待庵」(1581年)は2畳目台という究極の極小空間である。内部に座ると室内の全体像を俯瞰することができないために、壁や床など部分の構成要素の関係性が頭の中で総体化されて空間が把握される。部分に宿る精神性が主体となり、茶室はその極小的な大きさを超えて無限の広がりを獲得する仕組みが読み取れる。

住宅は人を収容するだけではなく、個人性やライフスタイルを支える器でもあるので、空間スケールに関する要素が多層化する。たとえば、鴨長明の「方丈記」に描かれた方丈の庵のように、社会との関わりを断ち、生活と物を必要最小に限定すると簡素な極小住宅が生まれるだろう。このようなマイナスのデザインにおいても、生活の質や振舞いを序列化して焦点を絞り込むと、小さいが故に独特の空間性が表出する。

コルビュジエ自身の別荘「カップマルタンの休暇小屋」(1956年)は3・66m四方のワンルームであり、住宅と呼ぶよりも名前通りの小さな小屋(キャバノン cabanon)である。8畳ほどの室内は2・26mの天井高から窓の配置、コート掛けのフックに至るまで前述したモデュロール寸法により計画されている。特に目を引くのが簡素な造り付けの家具である。周到に計画された家具を渦巻き状に追っていくと、当時コルビュジエがどのように一日を過ごしていたかが鮮明に蘇り、家具によって、この地における生活の歓びそのもの

のがかたちとして実体化されている。身体に最も密接な係わりをもつ家具が濃密な生活空間を築いていたことが読み取れる。

東孝光の自邸「塔の家」(1966年)は都心に住むという強い意志から、6坪の狭小変形敷地に建てられた。皆のような荒々しいコンクリート打放しの内部は、家族3人が生活するためのぎりぎりのスペースが積層した一室空間である。階段や吹抜けを通した自然光の広がりにより内部は適度な開放性が確保されているが、各層に配置された諸室は広めの踊り場のような場所であり、移動の際には個室を通らなければならぬ。家族は自然に顔を合わせる一方で、家族間のプライバシーを確保することは難しい。当の住人たちは、この住宅の暮らし方を自然に身に付けていたようだが、極小住宅は一般的な家族のかたちを更新することもあるのだ。

新陳代謝というメタボリズム思想を具現化した「中銀カプセルタワービル」(黒川紀章、1972年)は、工場生産を前提とした交換可能な住宅ユニットであるため、住宅のサイズがトラック輸送の制約から決定されている($W2\cdot5\times D4\cdot0\times H2\cdot5\text{m}$)。生活に必要な一通りの什器や設備、機器を限定せず、すべて用意するためにオリジナルのユニットを開発し、コンパクトな生活空間が実現した。これらの極小住宅の事例は住宅を考えるうえでは極端な例かもしれない。しかし建築的テーマの明快さに加えて、小さいが故の創意工夫に満ち溢れていることが多い。極小住宅はスケールと空間性の密接な関係を理解するための、重要な事例として捉えることができる。

スケールをデザインする

住宅において空間スケールの扱いが特徴的な例を見てみよう。篠原一男は「住宅は芸術である」と宣言し、「人間をこえる尺度をもつた広がりをつくり、それを人間のものに戻していくたい」と語った。ライフスタイルに傾倒した住宅の在り方に疑問を呈し、住宅を純粋な抽象空間として置換する試みである。「白の家」(篠

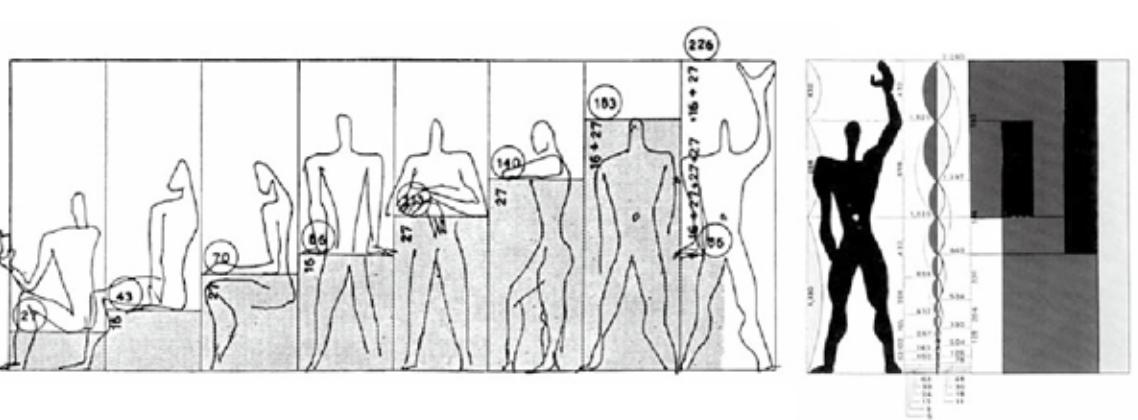


中銀カプセルタワービル



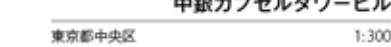
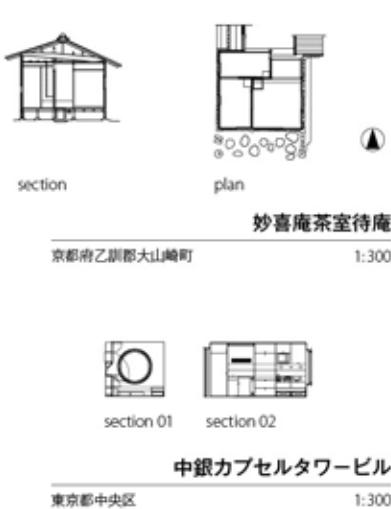
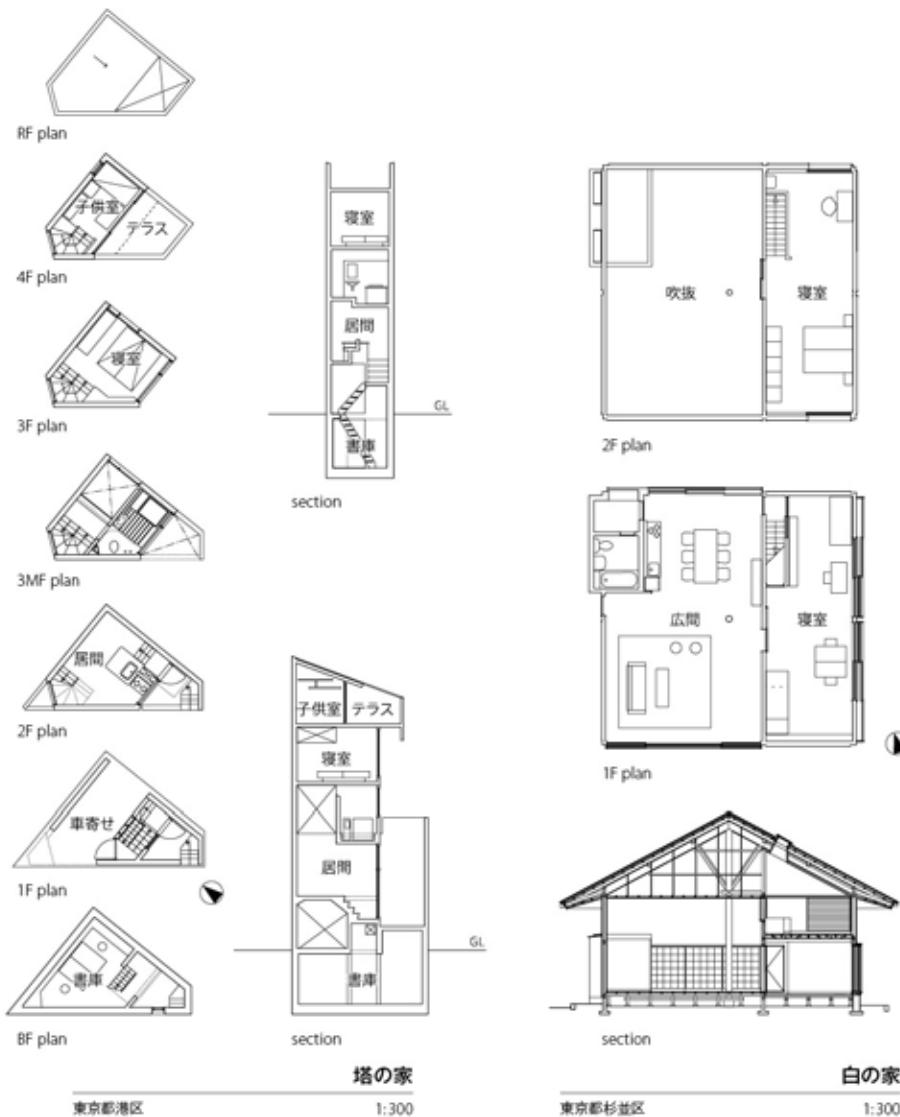
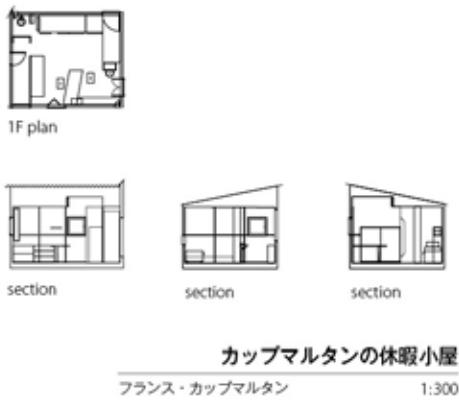
塔の家

* 「塔の家」白書(住まい学体系)



モデュロールと身体の動きとの対応

モデュロール



操作するということは、人々の生活そのものを注視し、かたちに置き換える作業の基盤となる。住宅という小さな建築だからこそスケールの扱いが重要なのだ。

(下吹越武人)

坂本一成の「House SA」(1999年)は対比的なアプローチである。住宅の多岐に渡る諸条件を等価に扱うことで生成する多義的空間が提案されている。空間構成の骨格は螺旋状に旋回するスロープ状の空間だが、その強い構成が支配的になることを避けるように他の要因との対応を積極的に重ねて計画されている。たとえば、変形した敷地に沿った外壁や、OMソーラーの取付けによる南に向いた屋根の棟、恣意性を避けた混構造の採用など、部分においてそれぞれの根拠を用いて選択が行われている。序列化しない併存の状態を意図した空間は、結果として多種多様な場を生成する。この一見バラバラになりそうな場の連なりを編集し、全体性を与える役割を果たしているのが完璧なプロポーションをもつ空間スケールの操作である。さらに、「House SA」には膨大な数の収集物も収納されている。とても小さな器から古い家具に至るまで、様々なサイズをもつ収集物さえも、空間と共に並列して存在している。卓越したスケールデザインによって物が相対化されることで、個人の趣味や嗜好性という小さな枠組みを超えた自由な開放性を獲得しているのだ。

空間スケールは、それぞれの住宅の事情に合わせて自在に操作可能な要素である。そして、建築家、あるいは住み手という主体が強く現れ、空間の個性をつくり出している。実際に住宅を訪れ、その空間構成とスケールを体験して「そうだったのか」と腑に落ちることも多い。空間スケールには図面や写真だけでは読み取ることのできない、様々な思考や経験に溢れているのだ。しかし、多くの住宅は慣習的な寸法体系による計画や、規格品、流通資材の採用により、空間スケールが画一化、没個性化する傾向が見られる。スケール

原一男(1966年)は日本の伝統的な空間構成を主題にしている。10m四方の正方形平面は中心をずらし点を支える北山杉の丸太が立つが、天井と壁は白く塗られていて小屋裏が見えないため、構造的な意味合いが後退して象徴性が強く現れている。構成要素を限定し、極限まで抽象化された空間性は生活の日常を拒否するような厳格さをもつが、それでもなお住宅として機能するのは前述した寺院に似た「大きさ」の許容力によるのかもしれない。生活を受け入れながらも自立する抽象性の希求は、住宅建築がその規模や用途を超えて、広く建築全体のテーマ性へ拡張することを意図している。その前提として、空間の大きさが重要な要素を成しているといえるだろう。



白の家